

新渡戸稲造略年譜

(1862年～1933年)



1862 (文久2) 年

南部藩士新渡戸十次郎とせきの三男として、盛岡市鷹匠小路^{こうじ}に出生。

1871 (明治4) 年

上京。叔父太田時敏^{ときとし}の養子となる。

1877 (明治10) 年

7月に大学予備門退校。

9月、開拓史札幌農学校入学(2期生、明治14年7月卒業)

1884 (明治17) 年

一年通った東京大学を退学し、9月にアメリカへ私費留学。

ジョンズ・ホプキンス大学 (Johns Hopkins University) で学ぶ。

1887 (明治20) 年

在米中に札幌農学校助教。農政学研究のため、ドイツ留学を命じられる。

1891 (明治24) 年

1月、メリー・エルキントンと結婚

2月、帰国し3月から札幌農学校教授

1894 (明治27) 年

1月、豊平区の貧民街に遠友夜学校^{えんゆうやがっこう}創設

1897 (明治30) 年

10月、病気(神経症)のため札幌農学校を辞任

1898 (明治31) 年

7月、静養のためにアメリカへ



1900（明治33）年

アメリカ滞在中に「BUSHIDO」出版

1901（明治34）年

1月、帰国。2月、台湾総督府技師（明治36年まで、
台湾の製糖産業に貢献）

京都帝大教授、第一高等学校校長、東京帝大教授

1918（大正7）年

4月、東京女子大学初代学長

1920（大正9）年

5月、国際連盟事務局事務次長就任

1926（昭和元）年

12月、同事務次長辞任

勅選貴族院議員

1929（昭和4）年

太平洋問題調査会理事長

☆昭和6年9月

柳条湖事件（関東軍が軍事行動拡張、満州事変へ）

☆昭和7年1月

第一次上海事変勃発

1932（昭和7）年

2月、松山事件が起こる。

☆2月～3月、血盟団事件（井上準之助、團琢磨）

新渡戸邸にポリボックス、護衛付きで外出

4月、反日感情の高まるアメリカへ講演のために出発

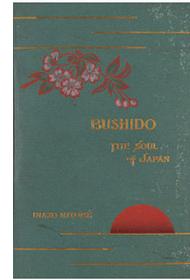
1933（昭和8）年

3月、メリー夫人を残して帰国

☆3月、日本は国際連盟を脱退

8月、カナダのバンフで開催された太平洋会議に出席

10月16日、ヴィクトリア市ジュビュリー病院で死去（享年71）



平和の戦争 軍事的勝利は救いではない

来松した新渡戸博士語る

日本が支那を相手に戦う―それは軍部が主張するように必ず勝つかも知れない。だが、一体勝つたらどれだけの利益があるんだ。その結果は、おそらく全国民が重税に苦しむだけだろう。せつかく五十年もかかって築き上げた文化と信用を一朝にして失墜するのみだ。

人殺しの戦争には勝っても、その後の長い間の平和の戦争に、勝てる見込みがあるのか？ 徒に雷同して万歳々と叫ぶものが、この際、忠臣視され、真に国家の前途を憂えるものが、国賊視される現代だ。

日露戦争がすんだ時、当時の参謀総長児玉大将と僕は同車したことがある。その時大将は、「日本は永い戦争はやれないよ。露国を相手にして今回つくづくその感を深くした」と云っていた。まったくその通り、戦争が如何に間違っているかということは既にその当時から識者間において明白であったのだ。

アメリカは日本と開戦しないよ。そんなにしなくとも日本を苦しめようと思えば絹糸を買うのをやめれば咽喉を締めるようなものだ。

現在の日本を亡ぼすものは軍閥と共産党だ。

戦争がさかんになれば、共産党が反動的に必ず勢いを増す。そこで日本の危機を招来するというようなことを日本の軍人は少しも考えないでワイワイ騒ぐんだ。刻下の問題として日本の国では、共産党よりも軍閥の方が危険だ。当局は小中学校を通じて、少国民たちにさかんに軍国主義を吹き込みつつあるが、これは恰も支那の教科書に排日を吹き込むのと同様で、決してよい結果を齎さないと思う。

（現代語表記に一部変更）

新渡戸博士の愛媛での動向（昭和 7 年 2 月）と新聞報道

3 日（水）今治市 越智中学（今治南高校）他で講演

越智中学の校長、村越銃之輔は札幌農学校出身。 今治泊

4 日（木）昼前、松山駅到着。迎えの車で道後の「鮎屋」旅館へ。

伊予新報、愛媛新報、少し遅れて海南新聞の記者に取材を受け、時局談をオフレコで語る。

午後 12 時 30 分、県公会堂で講演「日本人の長所と短所」

午後 3 時、東雲町青年会館で少年団に講話。

午後 4 時、松山農学校で講演（国松 斗 升 校長） 松山
泊

5 日（金）松山発、八幡浜へ移動。

午後 1 時、八幡浜町愛宕公会堂で講演

午後 3 時、西宇和郡少年団に講話

午後 5 時、宇和島へ 宇和島泊

☆ 5 日の新聞報道（海南新聞、伊予新報、愛媛新報、各紙朝刊）

「共産党と軍閥が日本を危地に導く、上海事件に関する当局は三百
代言式だ」の三段見出し（海南新聞朝刊）

掲載された新渡戸発言

「近頃、毎朝起きて新聞を見ると、思わず暗い気持ちになってしま
う。わが国を亡ぼすものは共産党か、軍閥かである。そのどちらが怖
いかと問われたら、今では軍閥と答えねばなるまい。上海事件に関す
る当局の声明は全く三百代言的という外にない。」

伊予、愛媛ともに発言を報道したが、談話だけである。

以降、海南新聞だけが新渡戸発言を糾弾する。他紙は沈黙。

(海南新聞は、新渡戸糾弾キャンペーンで部数を伸ばす目論見)

全国紙の朝日、毎日には報道管制がひかれ一切、何も報じていない。

6日(土) 午前宇和島中学校で講演

午後12時30、南予会館で講演

宇和町へ移動? 宇和町卯之町松屋旅館泊(?)

☆海南新聞6日(土)朝刊

社説「新渡戸氏の奇怪な主張」を掲げる。

博士の発言

「軍閥が国を亡ぼす」

「上海事変の当局の声明は三百代言」

の二点を、不謹慎、非常識な発言として厳しく批判。

7日(日) 新聞報道はなく動向不明。 帰京経路不明。

☆海南新聞7日朝刊

社説「新渡戸氏の為に惜しむ」を掲げる。

「光輝ある帝国軍隊を極悪危険な共産党と同一視して、その共産党より軍部が国に禍であるとは言語道断。上海事変における日本の態度は、国家自衛権の当然の行使であって、その範囲を超えていない。」

☆海南新聞8日朝刊

読者の投稿を大きく扱う。(前日も松山連隊副官の批判談話掲載)

「軍隊は大君の統^すべ給う平和の天使」「非国民新渡戸」などの見出

し。

20日(土)

愛媛県在郷軍人会は大会を開き、新渡戸糾弾の宣言を発表
(24日に海南新聞がこの宣言を掲載)。

「二月四日、新渡戸稲造氏の新聞記者に対して為せる言辭は奇矯にして有識者としての謹慎を欠き又名士なるが故に中外に影響する処少なからず。(中略) 聖旨を奉体し、奉公の一途に邁進しつつあるわれらの在郷軍人の起つて新渡戸氏の反省を求め訂正を促し猶 ^{がえ} 肯んぜずば ^や 已む

なく国民の ^{よろん} 輿論に問ひ ^{あえ} 敢て同氏の自決を期せんとす。」

愛媛県在郷軍人会一同

☆海南新聞25日(木)朝刊

「新渡戸氏の自決を促す」の見出しの社説で糾弾。

新渡戸批判の世論が全国的に高まっていること、中央軍部から松山憲兵隊に真相究明の照会があったことを明らかにした。新渡戸発言は国家国民に関する大問題。中央でも各種刊行物で新渡戸発言が攻撃弾劾的になっていることを紹介し、在郷軍人会の宣言を引用しつつ、「すべての公職を辞任して、謹慎せよ」と断じた。

(海南新聞の報道、左から2月5日、3月1日、3月7日)



大阪毎日新聞愛媛版の新渡戸博士擁護記事

関係する人物

曾我正堂（本名 ^{きとう} 鍛 1879.7～1959.12）

愛媛のジャーナリスト（伊豫日日新聞）

事件当時、毎日新聞松山通信部員



森恒太郎（1864.9～1934.4）

愛媛県会議員、余土村村長、

盲天外は俳号、事件当時道後湯之町町長

自伝『一粒米』（明治41年）に、新渡戸
稲造博士が長文の心のこもった序を寄せて
いる。



^{かん}菅 菊太郎（1875.4～1950.5）

新渡戸稲造博士の愛弟子。札幌農学校卒
在学中に博士の私邸に出入りし、蔵書
を読みふけた。愛媛に帰り、教育に専念。

事件当時松山農学校教諭

愛媛県立図書館長、農学博士



国松 ^{とます}斗 升（生年月日不明、本籍静岡）

東北帝国大学農科大学農学科卒



事件当時松山農学校校長

2月28日（日）

毎日新聞は愛媛版一面全部を使って、新渡戸博士擁護記事を掲載。海南新聞の報道は全然の誤りである。曾我正堂記者は鮎屋に同席していた三氏に証言を求め、博士のために真相を発表する。

海南新聞は、「日本を亡ぼすものは共産党か軍閥か」その他、捏造した事実と文句をつらね、記事に掲げた。これは絶対に博士の言葉ではない。

曾我記者は三氏（森恒太郎元愛媛県会議員、菅菊太郎松山農業学校教諭、国松斗益松山農業学校校長）に順次会って新渡戸発言の真相真意を聴き取り、海南新聞の一連の報道は誤解誤記に基づくものだ、とした。

以下に要約。

24日午後3時、曾我は森恒太郎（俳号・盲天外）を道後の天心園に訪問して取材。

森が聞いた新渡戸発言、「博士は国際連盟の満蒙問題に対する認識不足について語り、連盟の委員が調査で中国へ行くときには、博士も出かけて行って満蒙問題に対する連盟の誤解を解きたい。連盟の認識不足の上に上海問題が起こってきた。連盟の態度はますます硬化している。わが国は領土的野心で出兵したのではないことを連盟によく説明する必要がある。博士の軍閥批判発言は、わが国のことではなく、支那の軍閥、世界の軍閥のことについて外国人のいったことを引用して説いたものだ。三百代言の発言は、支那の宣伝が行き届いていて、西洋人の中には日本の釈明を三百代言の如くに誤解している者がいる、という意味で博士は使ったのだ。」

24日午後4時半、松山農業学校を訪問し、菅菊太郎に取材。

曾我記者は、森から聴き取った内容を菅にそっくり伝え、森の証言が

間違いないか、確認した。菅は、「森さんはよく記憶されているね、その通りです」と森の証言を認めた。その他に、伊予史談会が新渡戸博士にご覧いただきたい書類などを陳列していたので、菅はそこへ博士を案内したことや、他の記者に博士が時局談を始めたところへ、遅れて来た海南新聞の記者が入室した。などと曾我に証言した。

25日午前11時半、愛媛県庁で国松松山農業学校校長に取材。

昨日（24日）は、国松は講演があり、学校には不在だった。また、この日は県庁へ所要で出向いていた。そこへ曾我が出かけて行った。

曾我記者は、森と菅から聴いたことをそのまま（取材ノートを読み）国松に伝え、真偽をたどした。国松は、「私の聞いたのもその通りです。その森さんの話につきます」と応えた。同紙の最後の二人のやりとり。

曾我「何かご記憶になっていることでお二人のお話以外のことはありませんか」

国松「博士が新聞記者にお会いになったのは十分くらいのもので、そんなにいろいろな話はありませんでした」

曾我「海南新聞に書いてあるようなことが博士のお口から出たものとは常識上考えられませんからね」

国松「実際そうで、あんなことは全然博士のいわれなかったことです」。

☆ この取材特集記事（新渡戸博士擁護）は愛媛版朝刊に28日（日）に掲載される。



大阪毎日新聞愛媛版

（曾我正堂令孫、曾我健氏提供）

事態収束に動いた軍部と海南新聞の反撃

2月27日（土）夕刻、東京小石川の新渡戸邸

「新渡戸発言」について、軍部は事態の収束に向けて動き出した。（☆この背景に政府上層部の働きかけがあった？）海軍次官の左近司政三と陸軍省軍事課長の永田鉄山の二人が小石川小日向の新渡戸邸を訪ね、新渡戸博士に発言の真意を質した。左近司は代表して次の談話を発表した。

「新渡戸博士が過日、愛媛県下新聞記者と会見の際、我が軍部を誹謗する内容の記事が伝わって世間の問題となり、猛運動を起こすというような関係が伝えられるに至った。僕がかねてから博士の如き欧米名士と交際深き紳士に事態の真相を了知してもらって国家のため努力していただきたいと考えていたので、満州問題、上海事変等の経過説明等で本日、陸軍省の永田大佐とともに博士を訪問したところ、博士は右会見談として伝えられたところは、全然博士の真意と異なり、世間の一部に博士の真意を誤解するものあるを心外として縷々当時の事情を説明された。（中略） 兩人（左近司と永田）も釈然として博士の心情を了として重ねて国家のため一段尽力されたき旨申し述べて引き取った」

☆この左近司談話は通信社によって配信される。伊予新報「軍部との了解なる」、愛媛新報「益々国家に尽くす」、大阪毎日「『新渡戸博士の会見談は全く誤報』、訪問した海陸軍当局、国家のため一段の尽瘁を切望、と左近司海軍次官談。海南新聞はこの談話を報道せず。

☆大阪毎日愛媛版の新渡戸博士擁護と、軍要人の博士訪問に上からの意向があったかどうか。説明が必要な大きな謎である。 宮内省（現在宮

内序) の侍従は松山事件を調査した記録がある。

3月1日(火) 海南新聞が総力を挙げて反撃。

「新渡戸博士失言問題の顛末」と題して、第一面ほぼ全部を使って反撃し、誤報ではないと主張した。(博士を擁護した三人の他、関係者への取材経過を発表。また松山市内の講演会での発言も調べ、同様の論旨の発言があったことを明らかにした)。

「(前略) 海南新聞の報道が事実と相反するがごとき誤想を抱くものがあるのは世間を誤ることはなほだしく、かつ本社を誣^ぶゆること著しきものがあるので、本社は事実のいきさつを発表して世間の認識を正確ならしめる義務があると信じる。いうまでもなく博士は大毎の顧問の職にあるのではからずもこの問題が突発したので同社地方版関係の者は、いざお家の一大事とばかり忠勤ぶりを発揮することとなり同席した地方の議員や教員を強いて捕らえ来たって新聞記者のよくやるいわゆる誘導尋問を行い、思う壺にはめたものであることは新聞常識を有する者には自ら明瞭であって (以下略)」

記事は、大阪毎日新聞愛媛版の森恒太郎の証言に作為と矛盾が数々あることを記述した。そして最後に大阪毎日愛媛版で曾我記者の質問に答えた菅菊太郎を松山農学校に訪ねて問いただし、事実関係の確認を行っている。菅はこの中で、「新渡戸博士は全く学者肌で、すべて正直だから困る」と述べ、事実上新渡戸発言(軍閥批判)を認めた。



(左は軍人会館、在郷軍人会の本部が置かれる。戦後は九段会館)

資料 5

帝国在郷軍人会の糾弾と新渡戸博士の謝罪

3月2日(水)

帝国在郷軍人会第八回評議員会は新渡戸発言を問題提起

「新渡戸発言をこのまま放置すれば、時局重大の折柄、国論を混乱に導くものであるということで意見が一致し、評議員の中から糾弾委員が数人選ばれ、よく3日の夕刻、糾弾委員のメンバーが聖路加病院に入院中の博士を訪れた。メンバーはさっそく博士に発言の真意を質した。博士は弁明したが、松山での講演の速記録を持参していた松山選出の評議員が、「講演のなかにも軍閥という言葉は数多く使われているが、内容の前後から推して明らかに日本の軍閥を指したもので、断じて支那のそれを指したものとは受け取れない。このほか暴言と符節を合する言葉は講演中に多々ある」と指摘、質した。博士は狼狽し、「言葉の足りなかったことは何といたっても僕の責任だから明日諸君の集会の席上で陳謝する」と約束した。

3月4日(木) 新渡戸博士陳謝

新渡戸博士は、在郷軍人会評議員会で陳謝し、頭を垂れた。

当初、「日本を亡ぼすのは軍閥か共産党、日本の声明は三百代言」の発言について釈明して退場しようとしたところ、評議員から釈明を求められ、場内は騒然となった。立ち去りかねた博士は、演壇にもどり、

「私の言葉の足りなかったことから世間を騒がせてまことに申し訳がない。よって私は諸君に対して陳謝する」と頭を垂れた。

3月7日（日）海南新聞が総括記事を掲載

「兜脱いだ新渡戸博士 全国郷軍に陳謝す 詭弁を弄しても事実は明白」の四段抜きの見出し。「(前略) ついに天下の裁量によって自ら暴言を肯定することとなったのである。すなわち言葉が足りなかったといい、かつ多数人のまえで頭を垂れて陳謝したことは事実を肯定するものでなくて何ぞ。本社の正しき主張はついにむくいられたのである」と、海南新聞は凱歌をあげた。

☆昭和37年1月に出版された追悼集『香川熊太郎翁』の記述。

松山事件で新渡戸糾弾キャンペーンのことを、香川の部下だった大野香月は次のように書く。「同社の糾弾キャンペーンは大きな反響をよび、「非国民を葬れ」との声が日本全土をおおうようになった。博士は日本に隠れるところがなくなり、アメリカに逃亡し、異郷の地で寂しくこの世を去った。博士の発言は祖国を売る行為といわなくてはならない。大胆率直に何ものにも恐れることなく報道したことによって、南海の一隅から発した声が満天下をなびかせ、海南新聞の声価を高めたことは、これまた常人のできることではなく、偉大な新聞本来の使命達成だったことは、特筆大書すべきことだろう」

☆愛媛新聞120年史（1996年）は、「新渡戸稲造への糾弾事件」の見出しで客観的に事実を詳述し、「残した大きな教訓」と総括している。

「海南新聞の新渡戸糾弾事件は時代に流され、真の国際認識を持ち得なかったジャーナリズムの悲劇でもあった。(中略) 軍国主義の高まりに直面して、ジャーナリズムを支配していたのは沈黙だった。発言の正しさを認識した人は少なくなかっただろうが、それを行動で示すジャーナリズムは、すでに声をひそめていた。『この時期、新渡戸さんもまずいことを言ったものだ』というのが本音ではなかろうか。新渡戸事件が今日

に教えるものは少なくない。

資料 6

(いわゆる) 新渡戸博士の扁額



(西予市宇和町卯之町教会礼拝堂に掲げられた扁額)

Tranquillity of Ocean Depth

(深海の如き静けさ)

Tranquillity は英国表記、Tranquility は米国表記

1、新渡戸博士の来県履歴 (海南新聞、愛媛新報、伊予新報)

明治38 (1905) 年10月 八幡浜、宇和島、松山

明治40 (1907) 年8月 川之江、土居、西条、松山

松山では3日間、農業論の講義

昭和4年 (1929) 年4月 今治、松山、宇和島

昭和7年 (1932) 年

2月 今治、松山、
八幡浜、宇和島



海南新聞

昭和7年2月6日、新渡戸博士の5日の八幡浜講演の様子を報道

2、メソジスト教団卯之町教会

大正11（1922）年3月 仮教会が清水伴三郎宅に発足

大正12（1923）年8月 川上平三（関西学院神学校卒）を初代牧師
に迎える。翌年4月、長男 宗 薫^{むねしげ} 誕生。



大正15（1926）年3月 教会堂竣工。12
月に祝クリスマス会、関係者が集合写真に
おさまる。

昭和2（1927）年3月 川上牧師は大分県
竹田町の竹田教会へ転任。

川上はその後、長崎の 飽之 浦^{あくのうら} 教会へ。

原爆で妻と二人の娘を失う。宗薫は学徒動員中で助かる。川上牧師
は信仰を捨てる。

昭和50年、原爆の後遺症の上顎癌で死去。

卯之町教会

☆国際連盟事務総長ではなく、事務次長が正しい。

(在職 1919年8月～1926年12月)

4、扁額が新渡戸稲造揮毫とされる根拠

(新渡戸稲造研究家・遊口親之氏の研究論文から引用)

① 真武丈夫牧師(昭和8年4月～昭和13年3月)が、昭和10年8月に、教会誌「新興基督教」に次のように書いている。「嘗て、新渡戸稲造をして『海底の如き静けさ』と書かしめたる卯之町は、多くの人材を世に送っている。」また、戦後、NHKの求めに応じて卯之町の思い出をこのように語っている。「教会に5年間、御用に当たりました。ここが、最も私の心にある夢を見せてくれた心にのこる土地であります。ここの基督教会の玄関には、新渡戸稲造氏の書かれた『深海の如き静けさ』の額が掛けてあります。」

南予旅行の最後は昭和7年、扁額の書かれた時期をこの前後と推定すると牧師や信徒が間違ふことはまずありえない。

② 卯之町の素封家である清水、末光の一族は、明治から大正年代に同志社または札幌農学校に数十名の青年を送り出した。なかでも末光
いさお績(郡立農蚕学校長、松山農学校長、明治大学教授)やその弟の信三
のぶぞう
(同志社大学教授)は札幌農学校に学び、新渡戸精神をしっかりと継承している。町の有力者は新渡戸稲造をよく知り、敬愛していた。(町の有力者が来県の際に、博士を宇和町に招いたと推測される)

③ 新渡戸研究の第一人者大阪市立大学教授佐藤 まさひろ全弘は、この扁額に
つ

いて、次のように述べた。「英語の書はまことに珍しいものです。この句の字体がこれまで他に書かれているのを見た事がない上、新渡戸はいつも筆記体で流暢に書くのに、ここでは活字体面もドイツ風にヒゲ

をつけてあり、おそらく本邦唯一の絶品とと思います。サインがないのは裏にでもあるのでしょうか。」

④ 末光家一族の間では、身内間での伝聞として、この扁額について次のように語られている。

「末光績と手島ともきは札幌の豊平にある、新渡戸博士が明治27年に困窮家庭の青少年のために創設した遠友夜学校でともに勤労奉仕をしていた（末光績は19歳のとき、明治33年に札幌農学校予修科入学、23期。夜学校で教えるようになり、同じく夜学校で教えていた有島武郎と知り合い、敬愛するようになる。手島ともきは豊平の出身で、夜学校で裁縫を教えていた）。結婚を前に、二人は新渡戸先生に相談し、新渡戸博士は明治38年に卯之町に立ち寄り、績の父の末光三郎に面会し、二人の結婚について話し合ったに違いない。多分新渡戸の口添えがあつて、円滑に二人は結婚できたのであろう。新渡戸は愛する二人の門出を祝福し、深海の静かな流れのように人生行路を歩みなさいとの思いをこめて、この扁額を贈った。明治39年10月5日にともきの入籍届が出されている。」

5 「新渡戸稲造の揮毫」について（疑問）

① 新渡戸稲造は明治30年10月に札幌農学校を退任し、北海道を離れた。末光が農学校在学中（明治33年7月～明治39年7月）、札幌農学校に新渡戸稲造はいない。以後、博士が北海道（札幌）を訪ねたのは以下の2度だけである。

明治42年5月（北海道大学で講演、札幌農学校時代の級友と交流）

昭和6年5月（各地で講演、北大でも講演、夜学校も訪れる）

末光績は、有島武郎と深い交流があり、キリスト教信仰において兄弟の契りを交わしたが、新渡戸稲造の教え子ではない。時代がずれており、師弟関係はまったくない。明治から大正時代まで、新渡戸稲造が末光と面識があったか、疑問である。しかし、末光が博士を敬愛していたことは確かであろう。扁額が新渡戸博士揮毫とされるようになったいきさつは、末光家身内一族間の伝聞からではないか、と推察することもできる。

とはいえ、結婚のお祝いに「言葉」を贈るのなら、和紙に墨書し署名し、為書きするのが一般的である。なぜ、わざわざ板に書いて、送ったのか（東京から札幌、または実家の宇和へ）不思議である。板の裏にも署名はない。「Tranquillity of Ocean Depth」は結婚祝いの言葉なのだろうか。

Tranquillity は 1 が 2 文字使われていて、これは英国式表記である。しかし、クエーカー教徒は古い英語文字を使用するので、このことだけをもって新渡戸（博士は熱心なクエーカー）説を否定はできない。

資料 7

扁額の揮毫者はだれなのか

(近代国家に対する) キリスト者末光績の静かな抵抗

末光^{いさお}績の略歴

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 明治 14 年 3 月 | 卯之町に生まれる。生家は醸造業で素封家 |
| 明治 33 年 7 月 | 札幌農学校予修科入学（19 歳） |
| | 土曜会（カーライル研究の読書会、有島武郎と知り会う） |
| 明治 34 年 3 月 | 有島武郎らと札幌独立基督教会入会（20 歳） |



- 有島はこの年7月本科卒業、東京で志願兵に
- 明治36年1月 遠友夜学校の教師をする。(同僚に川嶋一郎、足助素一^{そいち})
- 明治39年7月 札幌農学校本科卒業(25歳) 10月、手嶋ともきと結婚
帰郷後、松山の歩兵第22連隊に志願入隊(1年間)
- 大正3年3月 東宇和郡立農蚕学校(県立宇和高校の前身)校長に昇格
- 大正8年5月 松山農業学校校長就任(38歳)
- 大正10年4月 同校を辞職し、東京帝国大学文学部本科学士入学(40歳)
- 大正12年7月 有島武郎軽井沢で情死、友人と共に火葬に立ち会う。
- 大正13年4月 明治大学講師(翌年予科教授)
- 大正15年3月 卯之町教会完成
- 昭和4年 恵泉女学園設立に関わる。
(講師、後に学監兼教授)
- 昭和18年12月 明治大学予科教授退職
(62歳)
- 昭和28年5月 恵泉女学園を辞職(72歳)
- 昭和30年12月16日 東京の自宅で死去(75歳)



右から二人目末光績、恵泉女学園提供

○札幌農学校時代の末光

「土曜会」で新渡戸稲造に大きな影響を与えた、イギリスの思想家トーマス・カーライル(1795年～1881年)の著書「衣装哲学」を読む。先輩に有島武郎、同期に川嶋一郎、足助素一などがいた。末光は熱心なキリスト者として成長し、教会の日曜学校と新渡戸博士が創設した遠友夜学校の教師を務める。また、川嶋一郎日記には末光のことが度々書かれている。



遠友夜学校教師を務めた札幌農学校生徒（1904年）右から二人目が あすけそいち 足助素一、
円内が末光績、後列左が川嶋一郎（北海道大学大学文書館提供）

明治三十六年当用日記（川嶋一郎）

一月七日（水）

〔受信〕千葉⁴²、大森孫四郎様 年賀状

今日は少しく雪降り出したれど十時頃小泉兄を訪問す。三年ノ小椋なる人⁴³も来りて、種々談話ニ時を移す。昼飯之御馳走ニ預り、四時頃帰舎す。東郷君⁴⁴病氣ノ為メ暫時外泊せんとて荷物を運ぶ。余も少しく手伝す。夜は末光、池田氏と夜学校ニ出掛く。未^[2]た時間割も道具も備^[2]はされど学課を休みとして時間表だけを写さしむ。三年の方は宜^[2]けれども、二年級ハ中々書^[2]けず一時間もかゝる。遂ニ余れも筆とりて書き与ふ。帰舎後、畜産反論を少しく読む。

○末光績と有島武郎

有島武郎（1878年～1923年）は札幌農学校の最上級生のとき、予科に入学した末光に人格的に多大な影響を与えている。信仰の上では内村鑑三の影響を受け、キリスト教信仰に最も篤い頃（?）、新入生の末光を知った。信仰でも人格でも末光は先輩で3歳年上の有島を敬愛し特別な思いを抱き続けていた。

末光は情死した有島武郎を追悼する一文「火の前に立ちて」を書いている。

以下は、この追悼文からの抜粋。

「明治 36 年君が渡米の暇乞として札幌を訪れた時は、僕は独立教会の裏の離れの薄暗い部屋で一人自炊生活をなして居たが、静かに机前にあると誰かがノックする音がある。オーッ、と云う答えに応じてドアは押し開かれ、君の姿が薄暗い入口に突っ立った。僕は見るより走せ寄って手を握り君の體にしがみついてしまったが、涙ばかり出て言葉が出ない。けれども相伝わる熱は総てを最も雄弁に語った。やや時あって何くれとなく語り合うた末、君は言に一段の力を込めてつけ加えた。『今度の札幌訪問には多少の用務もないではなかったが、僕の心では君に逢うのが最大のものだ。未だ誰にも語りはしないが、今度あちらから帰って来れば、僕は生命を打ち込んで、一つの学校を興してみたいと夢想して居る。其の実現の暁には君は悦んで僕を輔けて呉れるか』と、僕は溢るゝ喜びで、言葉以上に強い無言の応諾を之に酬いたが、其時の二人は全く来るべき新家庭を夢見若い恋人の心境にあったと云うてよい。」

有島は明治 36 年 8 月に留学のため渡米。その後欧州を回り、40 年 4 月に帰国。同年 12 月、東北帝国大学農科大学予科教授（札幌農学校の後身）になる。留学中にキリスト教に疑惑を抱いていた有島は、帰国後の明治 43 年に棄教している。大正 4 年 3 月に大学を退職。（妻安子の病状が思わしくなく、前年 11 月に一家で東京へ帰っていた）。また明治 42 年 1 月から大正 3 年 3 月まで札幌遠友夜学校の代表を務めている。大正 5 年に妻安子を亡くし、以後本格的な作家生活に入り、大正 12 年 6 月に軽井沢で「婦人公論」記者の波多野秋子と情死。

宇和の田舎に籠城して、農学校で教鞭をとり、学校経営にも携わっていた末光は、帰国した有島と手紙のやりとりで交流を続けていたが、二人の間は次第に心が通わなくなるのを感じていた。以下「火の前に立ちて」から引用。

「僕は長く自分の生活が三方に引き裂かれて、其何れにも徹するを得ないので、苦悶、焦燥の中に喘いでいたが、どうしても内なる飢餓に堪え得ないで、多大の

犠牲を拂い、長い過去の生活を振り捨てて、多年待望し来った一筋の道に、活くべき糧と水を求めつ々、一昨年から東都へ出て来て居る。それで、前よりは繁く君を訪れて語り合うことも出来、幾分互いの明るさを増すことも出来たが、僕は何時か機会を得たら是非君の前へ己が所信の総てを投げ出して、自分でもさっ、ぱりと整理をつけ、君にも見直してほしい節々があった。」

大正 12 年 7 月 2 日、末光は札幌農学校時代からの友人の足助素一から、有島の異変を告げる手紙を受け取り、不安を胸に友人たちと有島の行くへを探ることになる。同月 7 日に足助の使いの者が来て、有島が軽井沢で情死したことを告げた。有島の実弟と足助の三人で軽井沢へ駆けつけ末光は、身内の者たちに見送られ霊柩車の後ろにつき、火葬場まで行った。以下、末光の火葬の回想。

「大勢の手でたちどころに備はなり、二列の溝に敷き備えられた燃料の上に、二人の棺は相並べて静かに安置せられ、さらに豊かな燃料でこれを履うて火は一時に放たれた。(中略) 並び立つ落葉松は忘れ難い独特の姿を顕わし、足もとに茂る牧草、灌木に絡む野薔薇、葦切雀のかん高い声までがこれに添い加わって、石狩の野の曙をそこへ連れ出して来た。あゝ君と僕との隔てなき熱い心の抱擁にはどうしても北海の自然が其背景に添わねばならないのであろうか。

僕は今、君の最後に就いては何も考えたくはない。この一事は君が思想の厚いページと共に、終生の提題として、永く僕の前に横たわることであらう。」

○末光續の短歌「有島武郎をおもふ」(『ポエチカ』第十卷第二号)

並び燃ゆる二つのかばね燃えさかり
一つとなりて落葉松に映ゆ

○末光續の詩(雑誌「青年と處女^{をとめ}」大正 12 年 11 月創刊号、発行人曾我^{きとう}鍛)

囚はれたるものゝ為に
囚はれたものを鉄槌や爆薬で
惜気もなく破壊して行く
反動の産んだ革命者も
時には生命の為に必要であろうが
怖ろしい廃址の下から

拉^ひがれた我子を救ひ出す巨人のやうに
時代の惨憺たる廢墟の中で
大きな梁^{りょう}木^{ぼく}の一端に手をかけ
べた潰れになった巨大なものを
バリツ……バリバリツ……と持ち揚げて
下に拉がれて居る生純なものを
自由と生命に放ってやる
更に偉大な人が出て欲しい

ゆがむ時代、人、社会への警世

Tranquillity of Ocean Depth